KUT OB OG INTERVIEW 2022 13 SUMMER

スポーツへの思いと問題意識、そして恩師に導かれて。キャリアをサポートすることが、自分のキャリアを作ってくれた。

パシフィックリーグマーケティング株式会社
藤井 頼子さん
社会学部　社会学科　社会学専攻　2009年卒

スポーツ業界に特化して、キャリアへの思いを支えていく

私は今、パシフィックリーグマーケティング株式会社という企業で働いています。プロ野球のパ・リーグ6球団のビジネスを行っていて、6球団で一緒にやった方が良いこと、1球団ではできないことを軸に取り組んでいます。

会社としてはYouTubeの活用やプロモーションイベントなど、いろいろと手がけていますが、そのなかで私はキャリアコンサルタントの国家資格をもっていて、人材事業を担当しています。球団やJリーグのクラブなどスポーツ業界への転職を目指す方々を、サポートするというのがメインの業務ですね。

異なる業界から球団やスポーツに関わる仕事に転職したいという方は結構いらっしゃいます。そういう方たちを対象に、面談や書類添削などを通じて内定までのサポートを行っています。人材系企業のスポーツ業界特化版の事業ですね。

私自身いろいろな立場での経験を積んでいるので、そのリアルな働き方や楽しさ、やりがいなど含めてお話しできると思います。一方で、「野球が好き」ということをすごくアピールされる方もいらっしゃいますが、それだけでは入れません。ときにはビジネスパーソンとして球団にどう貢献できるか、といった観点からのアドバイスも行っています。

スポーツ×人材――二つの「好き」を掛け合わせて進む

職歴としては、現在が4社目です。大学卒業後に近畿日本鉄道株式会社に就職して、次に株式会社山愛、そしてオリックス・バファローズの球団職員を経て、今の会社で働くようになりました。

子供の頃から野球が大好きで、スポーツ業界の仕事をしたいと思っていました。新卒の採用枠は少なかったのでいろんな人に相談したら、一旦どこかで経験を積んでからでも遅くないよ、といったアドバイスをたくさん頂いたんですね。

そこで関西にあって総合職として働けて、何かスポーツに関わっている企業という3つを軸に就職活動をして、興味をもったのが近鉄でした。鉄道を中心に展開するビジネスが面白いと感じたことと、ラグビーチームを所有していたり、沿線のイベントもやっているので、将来携われたらいいなという思いもあり入社しました。

近鉄では最初の5年が駅ナカの店舗開発、最後の1年は広報でした。いずれはスポーツ業界へという思いは常にあったので、その仕事がどう次のキャリアにつながるかを考えていました。たとえば駅ナカのビジネスはスタジアムのお店作りに通じるなとか、イメージしていましたね。その間、情報収集を続けるなかでお会いしたのが、山愛での上司の方でした。選手のキャリアサポートなどへの考えが一致して、声を掛けていただき転職しました。

山愛での主な業務は、JリーグやBリーグなどの選手へのキャリア支援。これからプロになる選手たちに新人研修の運営を行ったり、また引退後のキャリア相談や再就職のサポートを手がけました。またその他、JOCでのオリンピック候補選手に向けた研修もありましたね。ただ仕事は充実していましたが、スポーツ業界のリアルな部分は、中に入らないと分からないなとも感じていました。ちょうどそんなタイミングでバファローズの募集があったんですね。近鉄で店舗開発などをやっていたことと山愛でのスポーツ業界の経験から採用されました。

バファローズでは、チームの応援グッズなどの商品企画をやっていました。自分が企画したグッズがSNSで評判になったりとか、反応がダイレクトでやりがいがありましたね。でも一方で、人材についての関心も持ち続けていたので、キャリアに関する勉強も続けていました。そんななかで昨年パシフィックリーグマーケティングの人材関連部門の、

募集を知って応募したんです。

これまでのキャリアについてお話すると、「スポーツへの思いが強いんですね」と言われることもあります。ただ私はスポーツが好きというだけではなく、この業界におけるキャリアへの関心も、ずっと持ち続けてきたんですね。応援していた選手が引退後にすごく苦労していたり、場合によっては犯罪に関わってしまうといったニュースに、問題意識を覚えていました。そういう視点から、好きな二つのこと“スポーツと人材”を掛け合わせて、業界の課題解決に向けて進んでいるという感覚です。

今後は、スポーツ業界におけるキャリア支援のスペシャリストになっていきたいと思っています。それには多分3つの方向があって、まずスポーツ業界に入りたいという人、さらに業界の中で働いている人、そして選手。スポーツに携わる人の「働く」をテーマに、そこで役に立てる人間になりたいというのが大きな目標です。

恩師との出会いから始まった、夢中の四年間

関大は、実は第一志望ではなかったんですね。でもスポーツに関する研究をやりたかったし、スポーツ社会学という分野にも関心があったので、学部としては希望通りでした。

当時は本当に野球に夢中でしたが、永井良和先生（社会学部教授）の存在はとても大きかったです。パ・リーグやプロ野球の文化を研究されていると知って、「うわ、こんな先生がいる！」と驚きました。たまたま基礎研究一回生のクラスが永井先生だったこともあって、「私も野球が大好きです！」と言って先生の研究室に伺いました。それを先生も受け止めてくれて、こういう研究の本があるよとか、いろいろお話ししてくださいました。

永井ゼミでは女性阪神ファンの研究などをしていて、甲子園に行って調査をやったりしました。研究以外でも友達の女の子たちを野球観戦に連れていったり、夏休みはシアトルに短期留学して当時イチロー選手のいたメジャーリーグを観に行ったりと、野球一本の毎日でしたね。

特にゼミでは、フィールドワークの重要性を学びました。最初に全員、永井先生から緑色の手帳をもらうんですが、そこに実際のフィールドワークで見たものを、そのまま書いていくんですね。入ったときから、それをめっちゃ鍛えられる。思い返すと、私にとっての就活はフィールドワークの一環だったような気もします。

あらためて考えると、私は永井先生に出会うために関大に来たんじゃないかと思うくらいですね。就活時にはアドバイスをいただいたり、今もたまに連絡させてもらったりして、学生時代から先生とずっと一緒という感じです。

正直、入学当初は悩みもありましたが、卒業する頃にはすごく満足というか、めっちゃいい四年間で、やり残したことはないなと思っています。

学生へのアドバイスとして ── チャンスは自分で掴みに行く

ひとつ伝えておきたいのは、やりたいことはチャンスがあるときに掴まなくちゃいけない、ということですね。私は高校生くらいまで、周りに合わせるというか自分で決めて行動するタイプではなかったんですが、一回生のとき入ろうかどうかを迷った部活がありました。部室の前で何度もうろうろしたりしましたが、どうしても勇気が出なくて。そしてその後、思い切って電話したら、もう入部は締め切られちゃってたんです。すごくショックを受けましたね。

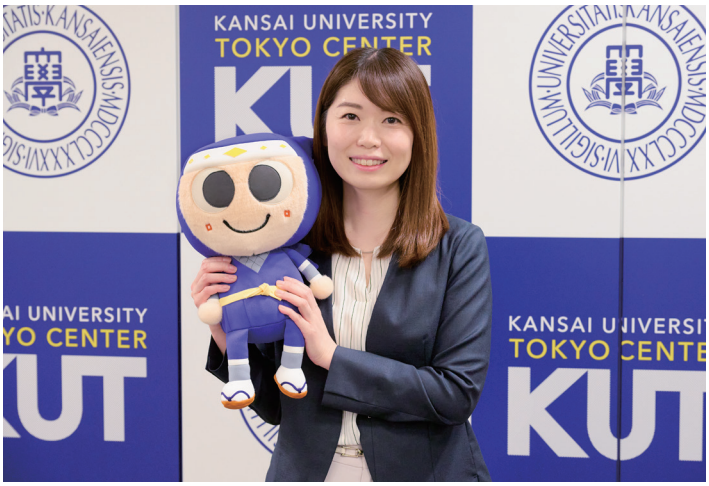
そのときですね、ボランティアや好きな野球のこととか、チャンスは自分で掴みに行かなくちゃいけないんだって感じたのは。その経験は、今のキャリアを掴んでいく姿勢にも活きていると思います。

あなたにとって関西大学とは？

好きなことに、全力で取り組ませてもらった場所です。やりたい勉強ができて、永井先生のような思いを受け止めてくれる方がいらっしゃる環境で、自分らしく正直でいていいんだな、ということをすごく感じました。

現役の学生さんだったら好きなことに全力で取り組めばいいし、まだそんなに絞れていなければ、さまざまな経験をすることで気づきや発見があると思います。この学生時代を、自分を開発していく機会にしてもらえればいいなと思いますね。

(撮影・取材：関西大学東京センターにて)



関西大学東京センター
100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL：(03) 3211-1670（代）FAX：(03) 3211-1671
https://www.kansai-u.ac.jp/tokyo/

公式website　公式Facebook　公式Twitter　LINEスタンプ　LINEスタンプ（関大ライフ編）

KUT OBOG Interview 2022-Summer
＊無断転載を禁じます。
発行・監修｜関西大学東京センター
企画・協力｜校友の皆さん
お問合せ先
ku-tokyo@ml.kandai.jp